

平成30年度
自然博物館の運営状況に対する評価書

和歌山県立自然博物館

平成30年度(2018) 自然博物館評価項目

自然博物館長による評価	当館は施設面積が約2,700㎡と都道府県立の自然史系博物館としては全国一規模が小さい。しかも開館以来36年を経て大規模な改修等は行われておらず、施設・設備の老朽化も著しい。そうした中で本年度は、夏季の猛暑等により目標の11万人には僅かに届かなかったが、10万9千人を超える入館者を迎えることができたことは、日常的な水生生物の維持・管理および展示はもちろんのこと、日頃の教育普及の成果として評価したい。資料収集・管理に関わっては、今後も予算の獲得を得て収蔵環境整備に努めたい。資料収集は分野による多寡はあるものの、おおむね順調に進められている。今後は、活用に向け準備を進めることが必要である。調査・研究面では、新たに大学および他の研究機関との共同研究がすすめられたことは評価したい。展示では玄関ホールを使用した展示や小企画展が年間を通して行われた。夏期特別展も「小さな粘菌の大きなワンダーランド」と題して、粘菌(変形菌)の実物展示を行うとともに様々な視点で粘菌を取り上げた展示となり来館者には好評であった。教育普及に関わっては、学校等の団体利用の実績が目標及び昨年度より下回った。この原因は不明であるが、子供の減少やそれに伴う学校の統廃合等が影響している可能性がある。一方で地域、学校との連携や県内博物館施設との連携は概ね例年通り進められた。また、ジュニア自然博アカデミーを開催するなど新しい取組を行っている。メディアへの広報・情報発信は例年通りの実績を示したが、ホームページやフェイスブックの更新回数は昨年度より増加したが、閲覧数は、ホームページでは減少し、フェイスブックでは増加傾向であった。また、新たな取組としてInstagramの活用を始めた。こうしたツールを通しての情報発信は今後ますます重要となることを考えると、一層の努力が望まれる。他の関連組織や団体との協力事業については、生物多様性と歌山戦略の実行やRDBの改訂等に関わって、活発に取り組みがなされていると評価できる。組織・運営では災害対応訓練、情報・データ管理、人権研修等県の定めた方針およびマニュアルに沿って、円滑に実施されている。施設・設備については、予算の獲得に努力し海水取水管、駐車場ブロック塀、研究室空調機、地下ダクト取替等の修繕がなされたことは評価したい。
評価部会による評価	全体としては概ね設定した業務目標を達成できている。施設整備や修繕を実施したことは評価でき、次年度も同様以上に進めて頂きたい。資料の有効活用に関しては、データベース等の整備を続行しつつ、教育・研究に活用されやすい方法・体制へと改善して頂きたい。それらを進展させれば、共同研究等を通じ、研究業績を伸ばせられる。資料収集・管理、調査・研究については、限られた設備・財源のもとでよく行われており、それらの成果は展示・教育にもよく反映されている。定期的な展示会の他、常設展の更新や入口スペースにおける展示の更新等も積極的に試みられており、高く評価できる。様々なコンテンツの教育プログラムの開発と実行、また多様なメディアを用いて広報・情報発信もよく実施されている。なお、30年度は予算獲得により一部の施設改修は行えたものの、現在の老朽化した手狭な施設では、自然博物館の活動を発展的に推進することは難しい。適切に管理された余裕ある収蔵空間を有し、現代的な展示設備と必要な実験・研究施設を備えた新館獲得へ向けて積極的なアピールを継続する必要がある。学芸員の負担が大きすぎることも懸念されるので、適切なエフォート配分により、学会参加、研修、社会貢献等の時間が確保できるように配慮されたい。

1. 資料収集・管理

自然博物館長による所見	分野によって多寡はあるが、職員による資料収集・調査は概ね順調に進められたと評価したい。収蔵施設の環境整備について、さらなる予算獲得の努力が望まれる。図書資料等の分散配架は、現状ではやむを得ない面もあるが今後の課題である。標本・画像資料等の貸し出しについては、点数だけでなく活用実績の把握が求められる。データの公開について、今年度は実施していないが、今後も公開に向け作業を進める必要がある。
評価部会所見	資料収集とその登録は順調に進められている中、収蔵施設の環境整備は、新館計画とからめて十分検討していくことが望まれる。調査研究予算の獲得、蓄積した資料の活用、資料の保管場所の確保が以前からの課題だが、まずは登録データベース化を全分野にわたりバランスよく行って頂きたい。今後、各分野の資料収集をより計画的に進め、活用するため、年次ごとの調査目標を掲げ、達成度を自己評価する等によって進展させて頂きたい。

①資料収集

A 適正な方法で資料収集が行われたか

平成30年度目標	法令、条例に基づき適正な方法で、精力的に収集活動を行う
実績	適正な方法で各分野の学芸員が資料収集を行った。
自己評価・課題・改善案	引き続き適正な方法で資料収集を積極的に行う。

B. 寄贈・寄託数は何件・何点か

平成30年度目標	館の受け入れ申請の規定に合致すれば、基本的に受け入れる
実績	平成30年度は植物16件1094点、昆虫19件6,242点、陸上脊索動物26件47点、魚類60件255点、無脊椎動物3件約1500点、地学 22件43点を受贈した。
自己評価・課題・改善案	引き続き可能な限り、寄贈・寄託を受ける。

C. 学芸員による収集は何件・何点か

平成30年度目標	各学芸員が積極的に資料収集を行う
実績	平成30年度は植物22点、菌類・粘菌類107点、昆虫 429点、陸上脊索動物20点、魚類151点、無脊椎動物202点、地学 62点を収集した。
自己評価・課題・改善案	引き続き可能な限り収集に努める。

②博物館資料

A. 資料の保存環境は適切か

平成30年度目標	適正な環境保持に努める
実績	収蔵資料が増加する中、収蔵スペースは飽和状態にあるため、保存環境が良好でない場所への一時的な保管も余儀なくされている。現在、借用している収蔵スペースも老朽化しており対応に苦慮している。
自己評価・課題・改善案	昨年度に引き続き、和歌山大学教育学部棟改修に伴う資料の受け入れ等のため新しい収蔵スペースの確保が必要になってきている。

B. 資料の調査を行ったか

平成30年度目標	専門分野ごとに精力的に取り組む
実績	地学、植物、菌類・粘菌類、昆虫、両生・は虫類、魚類、鳥類・ほ乳類、海産無脊椎動物の各学芸員は担当する分野の資料の調査を精力的に行った。
自己評価・課題・改善案	引き続き各専門分野の調査を精力的に行う。

C. 収蔵点数は何点か

平成30年度目標	前年度の上積みを図る。(植物61,000点、菌類・粘菌類8,000点、昆虫67,000点、貝類120,000点、陸上脊索動物510点、魚類5,200点、無脊椎動物110,000点、地学4,400点を目標とした累積収蔵数を目標とする)
実績	平成30年度は植物871点、菌類・粘菌類107点、昆虫6,247点、貝類約1,000点、陸上脊索動物41点、魚類406点、無脊椎動物414点、地学35件105点を収蔵した。
自己評価・課題・改善案	収蔵スペースが満杯状態にあり、大幅な資料の受入は難しくなっているが、館外等に新しい収蔵スペースを確保して、資料の充実を目指す。

D. 資料の管理(台帳、データ)は適切か

平成30年度目標	資料台帳、データベースの作成を引き続き行うとともに管理を徹底する
実績	各分野とも資料台帳及びデータベースの両面で資料管理を適切に行った。
自己評価・課題・改善案	今後も資料の管理を適切に行うとともに、利用者がわかりやすい資料の配架に努める。

③資料の活用

A. 他機関へ資料を貸出ししているか

平成30年度目標	依頼に応じて手続きを経て貸出しを行う
実績	カニ類標本2件18点(継続)、粘菌(変形菌)1件116点(標本51点、写真パネル等65点)、は虫類画像1件11点、多足類画像1件2点、地学8件15点(標本3件5点、画像5件10点)。 貸出先 博物館他1件。
自己評価・課題・改善案	館内の承認手続きに従って資料の貸出を行った。今後も適正な手続きを経て貸出を行う。

B. 図書を収集し、研究や閲覧に供しているか

平成30年度目標	予算の範囲内で収集し、研究・閲覧に供する
実績	65万3千円の予算で106点の図書を購入した。また、他施設との交換図書及び受贈図書1,037点を登録し、研究用と閲覧用に供した。
自己評価・課題・改善案	限られた予算の中で大量の図書を購入することは困難であるが、交換図書や受贈図書を広く受け入れ、図書の充実を図る。

C. 資料のデータを公開しているか

平成30年度目標	公開可能なものから順次実施する
実績	GBIF (Global Biodiversity Information Facility) にシダ植物、カニ類を含む無脊椎動物11,058点を公開中である。平成30年度は新しい公開は行わなかった。当館へ寄贈された工藤コレクション(昆虫類)の目録を作成した。
自己評価・課題・改善案	研究が進み公開が可能になれば、絶滅危惧種等の産地情報については配慮しながら公開していく。

2. 調査・研究

自然博物館長による 所見	調査・研究予算の現状や、研究設備の不足及び老朽化を考慮すると、分野による偏りは認められるものの、協議会資料（12～16頁）にも記されているように、おおむね良く行われていると評価できる。他大学や研究機関との共同研究が進められていることも評価したい。
評価部会所見	分野によって学術的公表のレベルは様々だが、概ねよく行われている。今後は、共同研究等を推進する他、科研費や外部資金の獲得に努められることを期待したい。調査・研究成果は、展示・教育活動等にもよく反映されていると判断される。研究予算と研究設備を更に充実させ、学芸員の研究時間を確保することで、今後はもっと調査研究活動および研究業績を増やして頂きたい。なお、学会賞を受賞した学芸員がいることは、実績欄に追記し明示しておく価値はあろう。一方で、学会誌等への研究成果の発表数が少ないので、各学芸員は、毎年1本位は論文を発表して頂きたい。

①調査

A. 使命に基づいた調査を行っているか

平成30年度目標	「和歌山県立自然博物館設置及び管理条例」及び「和歌山県立自然博物館の使命」に基づき調査を行う
実績	「和歌山県立自然博物館設置及び管理条例」と「和歌山県立自然博物館の使命」に基づいて収集調査を行った。
自己評価・課題・改善案	引き続き法令、管理条例、自然博物館の使命に基づいた調査を行う。

B. 外部機関・団体等と共同した研究を行っているか

平成30年度目標	研究テーマの必要性に応じて共同研究を行う
実績	和歌山植物研究会と共同し和歌山県産野生植物の分布調査を行った。 和歌山県水産試験場、中央大学、水産研究・教育機構等17機関が共同する「河川及び海域での鰻来遊・生息調査事業」、「鰻環境収容力推進手法開発事業」に参加してウナギの生態調査・研究を行った。 立命館大学や筑波大学の研究者と共同で細胞性粘菌有用株DM7の分類学的再検討を行った。 東北大学や岡山大学の研究者と共同し変形菌の腐朽菌からの栄養摂取に関する研究を行った。 京都大学と共同しヨシノボリ属魚類の分類について再検討し、図鑑にて報告をおこなった。 宮内庁と共同してハゼ科魚類の分類と生態について研究調査を行った。 琉球大学と共同し、干潟に生息する魚類の群集構造に関する研究を行った。 神戸大学と共同し両側回遊魚類の遡上生態についての研究を行った。 九州大学、琉球大学と共同しヒラスズキの生活史に関する研究を行った。 すさみ町立エビとカニの水族館との共同調査（潮間帯生物）をおこなった。 国立科学博物館の研究者と共同し白浜町から産出した星形生痕（ヒトデ類の生息跡）化石について研究を行った。 大阪市立自然史博物館や群馬県立自然史博物館の研究者と共同し、串本町から産出したヒゲクジラ類の頭骨化石について研究を行った。 瑞浪市立化石博物館の研究者と共同し、湯浅町等から産出した甲殻類化石について研究を行った。 財団法人益富地学会館の研究者と共同し、田辺市から産出したローゼン石について研究を行った。 国立科学博物館や財団法人益富地学会館等の研究者と共同し、那智勝浦町から産出したクモヒトデ等棘皮動物化石群について研究を行った。
自己評価・課題・改善案	必要性に応じて外部機関・団体等と共同研究を行う。

② 研究成果の活用

A. 展示・教育活動等に成果が反映されているか

平成30年度目標	得られた研究成果は速やかに展示・教育活動に反映させる
実績	採集・調査により得られた生物や資料について研究を行い、展示や論文・普及誌に掲載した。
自己評価・課題・改善案	引き続き研究の成果は、展示や教育活動に反映させる。

B. 学術的公表（館研究紀要、報告書、学会誌等）がなされているか

平成30年度目標	研究成果については学術的公表に努めるとともに自然博物館館報や自然博物館だよりで紹介する
実績	自然博物館報第36号及び自然博物館だより第36巻2号から4号と第37巻1号を発刊するとともに、Zootaxa、Paleontological Research、Mycoscience、昆蟲（ニューシリーズ）、四国自然史科学研究、国際誌 Journal of the Marine Biological Association of the United Kingdom、魚類学雑誌、瑞浪市化石博物館研究報告、南紀生物(2件)にて公表した。 南紀生物同好会、日本魚類学会、日本ベントス学会、日本古生物学会にて口頭発表を行った。 また、これまでの研究成果をまとめて、ベントス学会のシンポジウムと大阪市立自然史博物館で行われた公開シンポジウムで講演した。
自己評価・課題・改善案	引き続き研究成果の公表を、学会誌および自然博物館館報、自然博物館だよりなどで積極的に行う。

3. 展示

自然博物館長による所見	小企画展示や玄関ホールを使用した展示が年間を通して行われた。第二展示室において「和歌山県自然公園コーナー」にチラシやパンフレットを配架するコーナーを設けるなど、来館者のニーズに沿った仕様に変更した。変形菌の生体展示を昨年に続いて行っている。総論でも述べたように、夏期特別展「小さな粘菌の大きなワンダーランド」では、粘菌（変形菌）の実物展示はもちろんのこと、様々な視点で粘菌を取り上げた展示となり、期間中26,036名の入館者を得るとともに好評であった。一方、水生生物の展示水槽においては、淡水生物の展示が増加し、来館者に好評を得ている。この数年来の課題である大水槽の維持に関しては、予算面や新館建設の計画との関係から、早急に改善できる状況は望めないだけに、長期的な視点に立って対策を進めてゆく必要がある。
評価部会所見	新館構想との絡みや、スペース・予算等の制約がある中、工夫した展示が実践できている。定期開催の企画展・特別展の他、第二展示室や玄関ホールでの展示を随時更新する等、リピーターに配慮した展示活動が行われたことは高く評価できる。大水槽の維持に関しては、持続可能な対策の立案を求めたい。長期的視野に立った対策が必要だとしているが、どのような長期的視野なのかを明確によく相談しておくべきであろう。展示の工夫については、例年通り、子供から大人まで楽しめるような配慮がなされている。また、特別展では、恐らく数百万円もかけていない展示と推察される中、26,036名の入館者というのは高く評価できる。将来的には地元メディアとの実行委員会方式等で、外部資金の導入も検討して頂きたい。

①常設展

A. 長期的な視野に立った展示替えの計画があるか

平成30年度目標	新館構想を見据えた展示替えを計画する
実績	第2展示室において、ほ乳類などの小企画展を9回、玄関ホールにおいて7回開催した。既存植栽木を抜去し新館移転先での植栽展示用植物育成管理用地を確保した。
自己評価・課題・改善案	当館の構造上、大幅な展示替えは困難であるが、小企画展等でタイムリーな話題等に対応した展示を行った。

B. 計画的な維持・管理が行われているか

平成30年度目標	予算の範囲で適切に対応する
実績	屋内だけでなく屋外の植栽についても維持管理を行った。剪定・雑木等除去し美観維持に努めた。
自己評価・課題・改善案	今後も予算の範囲内で必要に応じて維持・管理を行う。

C. 日常的な保守・管理が行われているか

平成30年度目標	日常的に展示資料についての状態確認を行う
実績	休館日を除く毎朝、開館前の始業点検を行った。
自己評価・課題・改善案	引き続き日常的な保守・管理を適正に行う。

② 特別展・企画展

A. 展示のコンセプトは妥当か

平成30年度目標	自然博物館協議会評価部会で承認を得る
実績	特別展の展示コンセプトについては自然博物館協議会評価部会にて承認を得て開催した。
自己評価・課題・改善案	展示内容が適切か自然博物館評価部会で承認を受けて作業を進めることができた。

B. 展示の構成・展示手法はどうか

平成30年度目標	年少者の視点に立った平易な構成・手法に努める
実績	第2展示室において、小企画展を9回、玄関ホールにおいて7回開催した。また、NPOと行った共催イベントの成果物の展示等も夏休み期間中に行った。子供から大人まで幅広い年齢層が楽しめるよう触察展示や関連グッズ作製等を行った。
自己評価・課題・改善案	引き続き年少者も楽しめる平易な展示内容・手法に努める。

C. 入館者は展示に満足しているか

平成30年度目標	アンケートにより把握する
実績	アンケートを実施し、82%が展示内容に満足との結果であった。
自己評価・課題・改善案	引き続きアンケートを実施して入館者の意向を調査するとともに指摘された課題について改善に努める。

③ 出前展示

A. 何回企画を実施したか

平成30年度目標	年度内に5回以上実施する
実績	移動ミニ水族館を県内小中学校及び支援学校、地域からの依頼に対して合計7回（のべ約25,000人）開催した。
自己評価・課題・改善案	29年度目標を上回る回数を実施することができた。実施先の反応はいずれも好評であった。

4. 教育普及

自然博物館長による 所見	教育普及事業については、多様な取り組みと内容で実施されており十分な成果を上げていると評価できる。「移動ミニ水族館」については、今年度は学校だけではなく、地域からの要望にも応え7回の開催で約25,000名の来訪者を迎えることができ、いずれの開催地でも大変好評であった。また、新たな取り組みとして、ジュニア自然博アカデミーを開催し、小学生から中学生を対象により専門的な学習の機会を設けたことは評価できる。一方で、学校等の団体利用は団体数、参加者ともに昨年度実績及び目標達成には至らなかった。この理由は明らかではないが、悪天候や児童数の減少やそれに伴う学校の統廃合が影響している可能性がある。
評価部会所見	講演会、体験学習、地域との連携事業等に相応の成果が上げられており、担当した学芸員の努力に敬意を表したい。今年新たな取り組みとして実施されたジュニア自然博アカデミーについては、実施したことを評価したいが、その内容がこれまでの体験学習とどのように違うのかの説明を、試行であっても実績の中で記述しておいた方がよい。目標に届かなかった企画はあったものの、全体として概ね目標は達成できている。ただし、新規の利用者獲得にアイデアが必要である。学校の授業に即した館の教育プログラム内容、それを各学校へ紹介するシステムの現状を再確認してほしい。団体受入、出前授業、多様な館行事、「館だより」、友の会の活動などを通じ、様々な教育普及活動が行われ、地域、学校、県内博物館との連携も着実に進められている。ただ、館の規模に比べて負担が大きすぎるようにも思われるので、活動内容の整理を行い、適切な事業規模を考慮すべきかもしれない。有用な情報が得られるよう、アンケートの設問を工夫されたい。展示方法や企画展などについては、大人の意見を重視し、子供には、どんなことが学習できたか、どんなことを学びたいのか聞くことも重要であろう。

①学校・団体の利用者への解説

A. 学校、団体の利用数・利用人数

平成30年度目標	180団体10,000人
実績	170団体8,531人に対して解説を行った。
自己評価・課題・改善案	悪天候や児童数の減少もあってか目標に届かなかった。引き続き同様の対応を行いたい。

B. 利用者が満足しているか

平成30年度目標	アンケートを実施して把握する
実績	利用者に対してアンケート調査を行った結果、69%はリピーターで、82%が満足との回答を得た。
自己評価・課題・改善案	学校等の団体利用者には好評であったが、新規の来館団体の開拓についても努力したい。

②講演会

A. 講演会の回数

平成30年度目標	1回（昨年度は1回）
実績	講演会「わかやまの粘菌を知ろう！」を開催した。
自己評価・課題・改善案	毎年行っている「文化の日」に講演会を開催することができた。

B. 講演会の参加者数

平成30年度目標	募集定員の60%以上（36名）
実績	参加者23名、38%であった。
自己評価・課題・改善案	目標には届かなかったが、講演終了後には熱心な質問が相次いだ。広報、演題の設定など今後の課題にしたい。

C. 参加者が満足しているか

平成30年度目標	アンケート及び参加者の感想を聞き把握する
実績	アンケートは実施できなかったが、参加者から感想の聞き取りを行ったところ、いずれも好評であった。
自己評価・課題・改善案	引き続き講演会終了後、アンケートを取るとともに参加者から聞き取りを行い、次回への改善に努めたい。

③バックヤードツアー等の体験学習

A. 体験学習等の実施回数

平成30年度目標	25回
実績	裏方探検ツアーなど合計23回開催した（試行で開催したジュニア自然博アカデミーは含んでいない。ジュニア自然博アカデミーでは、野外調査を含めて地学分野5回、昆虫分野6回開催した。）。
自己評価・課題・改善案	荒天により3行事が中止となったため、目標を達成することができなかった。引き続き目標を下回らない体験学習を開催すると共に内容の充実をはかって行きたい。

B. 体験学習等の参加者数

平成30年度目標	募集定員の80%以上
実績	募集定員の80%を下回った行事は、23行事中6行事であった。また、和歌山の豊かな自然をより深く探求する子供向け研究者育成プログラムを実施する新たな取組ジュニア自然博アカデミーは、昆虫分野10名、地学分野10名であった（定員各10名）。
自己評価・課題・改善案	行事開催日の決定後に学校行事等の都合が変わったり、当日の天候及び体調不良等でキャンセルするケースも多い。今後も状況把握に努めつつ目標の達成を目指す。

C. 参加者が満足しているか

平成30年度目標	アンケート及び参加者の感想を聞き把握する
実績	アンケート調査と口頭での聞き取りを行った結果、参加者の感想はほぼ好評であった。また、行事後に友の会に入会があったり、再び来館いただいた参加者も多くいた。
自己評価・課題・改善案	行事開催後にアンケート及び口頭で感想を聞き、満足度を把握する。

④県民や地域との連携

A. ボランティア活動を受け入れているか

平成30年度目標	要望があれば受け入れる
実績	植物標本整理のためのボランティアを週1回のペースで3名受け入れた。和歌山大学との協定に基づくボランティアは1名だったが、他大学から大学生ボランティアとして2名の自発的な希望があり、標本作製や行事の補助等の活動を行った。
自己評価・課題・改善案	植物標本整理のためのボランティアは館の業務に大きな手助けとなっていて、引き続き受入を継続するとともに、他分野のボランティアも要望があれば引き受ける。

B. 友の会等の支援組織の活動に協力しているか

平成30年度目標	友の会等の支援組織の活動に協力する
実績	自然博物館友の会が開催する行事（26回、参加者951名）や出版物に対して支援・協力を行った（わんぱく探検隊の12回、約480人含む）。
自己評価・課題・改善案	自然博物館友の会を中心にして、今後も支援組織に協力を続ける。

C. 地域、学校等と連携した事業を行っているか

平成30年度目標	連携した事業を行う
実績	当館独自の出前教室においては25回（中止3回）、1,087名に対して観察会の指導や講演を行った。 県教育総務局総務課が主催するエキスパート職員派遣事業に職員を11回（中止1回）派遣し、271名に対して観察会の指導や講演を行った。 県立高校スーパーサイエンスハイスクール指導（向陽高校、日高高校、海南高校）。 地域におけるESD推進事業に関する指導（向陽高校、海南高校）。 海南市孟子のビオトープにおける観察会等での指導。 海南市商工会主催の「紀州海南ひなめぐり」展示受入。 エキスパート事業（キノコ、美浜町）やエコティーチャー（変形菌、当館）の講師を行った。
自己評価・課題・改善案	今後も当館の運営に支障のない範囲で、地域・学校および他館との連携に取り組む。

D. 県内博物館施設と連携した事業を行っているか。

平成30年度目標	連携した事業を行う
実績	県立図書館、南方熊楠記念館、南方熊楠顕彰館等の協力をあおぎ、特別展「小さな粘菌の大きなワンダーランド」を開催した。 県立紀伊風土記の丘と連携した昆虫分野の観察会を実施した。 県立紀伊風土記の丘が主催する「風土記まつり」に参加した。 県立博物館施設等が連携して進めているスタンプラリーに参加した。 県内博物館施設を中心とした和歌山県博物館施設災害対策連絡会議に幹事館として参加した。 南方熊楠記念館と連携して、野外観察会を行った。
自己評価・課題・改善案	今後も当館の運営に支障のない範囲で、他館との連携に取り組む。

5. 広報・情報発信

自然博物館長による 所見	各種メディアに対する情報発信は、例年通り活発に行われたと評価できる。ポスターに加えて広報およびイベントチラシ等を通じた情報発信についても努力の様子がうかがえる。一方、電話や来館による問い合わせに関しては昨年と同様の件数であった。また、ホームページ、フェイスブック等の更新回数を増やしたが、閲覧数については、ホームページについては減少、フェイスブック等については、増加となった。また、新たな取り組みとしてインスタグラムでの情報発信も行っている。来館者アンケートの結果からは、館情報の入手先としてのインターネットはそう多くはないものの、これからの情報発信手段として、その重要性はますます高まることが予想される。更新回数とともにその内容に対して工夫が求められているといえる。
評価部会所見	ラジオ・テレビへの協力、新聞各紙への寄稿の他、ウェブサイト、Facebook、インスタグラム等を利用した多様な情報発信によく努めていることは高く評価できる。特に、若年層はSNSを情報源としており、若者へアピールするにはSNSの活用が有効であると期待される。ただし、インターネットの閲覧回数をどの様に評価するかは難しいが、他の業務の支障にならない範囲で実施すべきであろう。SNS対策の一つとして、展示会等でも撮影スポットの設定、またインバウンド対策として展示解説の多言語化が望まれる。

①県民への直接的情報提供

A. 問い合わせ(電話、来館等)に対し、ていねいに対応しているか

平成30年度目標	質問者の疑問に対して、その内容に沿ったていねいな対応を心がける
実績	年間約500件の問い合わせに対応した。
自己評価・課題・改善案	問い合わせに対して、ていねいでわかりやすい対応ができたと考えている。今後とも質問者の疑問に沿って、ていねいな対応に努める。

②メディアへの情報発信

A. メディアへの広報・情報活動は行っているか、掲載件数

平成30年度目標	資料提供30件、記者発表1回（前年度並み）
実績	資料提供36件、県民の友26件、記者発表1件、毎日新聞他連載を含む掲載229件、県教委制作ラジオ番組「定期便教育の窓」1件、県教委制作テレビ番組「はばたく紀の国」1件。
自己評価・課題・改善案	今後も館運営に支障のない範囲で積極的な広報活動を行う。

③ホームページ等WEBによる広報

A. 更新回数

平成30年度目標	できる限り最新情報を提供するため、更新に努める（前年度52回）
実績	ホームページの更新回数は64回、閲覧回数231,191回を記録した。
自己評価・課題・改善案	更新回数は、前年度にわずかに及ばなかったが、広報担当及び学芸員が最新情報の提供に積極的に関わり、今後もタイムリーな情報発信に努める。

B. ホームページ以外の情報提供、広報活動を行ったか。

平成30年度目標	フェイスブック（ツイッターを含む）、ブログで最新の情報提供を随時行う
実績	フェイスブック、ツイッターでの更新回数は124回、閲覧回数は143,359件であった。
自己評価・課題・改善案	フェイスブック、ツイッターに加えてインスタグラムを利用して自然博物館の最新情報を発信していく。

④印刷物の制作

A. ポスター、チラシ等の情報提供、広報活動は行っているか

平成30年度目標	年間行事計画チラシ、特別展広報チラシ、冬季イベントチラシ、お話し会チラシ等を作成する
実績	年間行事計画チラシ7万枚、特別展広報チラシ14万枚、お話し会チラシ5千枚を4回作成し、県内だけでなく大阪府の小学校等にも配布した。
自己評価・課題・改善案	チラシ配布の効果は、アンケートからもはっきりと現れているので、今後も積極的な広報をすすめる。

6. 協力事業

自然博物館長による所見	実績にも述べられているように、南紀熊野ジオパーク推進事業や環境省との協力事業のほか、生物多様性和歌山戦略関連事業、RDB改訂に係る調査・資料収集、外来種リスト作成に係る県自然環境室との協力事業および博物館施設との協力事業等が活発に展開されていると評価できる。
評価部会所見	様々な関連組織団体・機関、大学等との協力・連携がよく行われ、和歌山県における自然史系博物館として十分な存在感を示している。特に、南紀熊野ジオパーク推進事業などは、対象階層が重なる部分も多いと予見されることから、より積極的なコラボを進めるのが良い。

A. 博物館の向上に寄与するため、他の関連組織・団体の活動に協力したか

平成30年度目標	自然博物館として積極的に協力する
実績	・南紀熊野ジオパーク推進協議会学術専門委員会に学術専門委員として出席した。 ・南紀熊野ジオパークセンター展示設計・製作等業務実施候補者選定委員会に選定委員として出席した。 ・関西広域連合が主催する生物多様性検討委員会に出席した。 ・和歌山県高等学校総合文化祭・自然科学部門、SSH等の各種教育機関が主催する発表会において審査員を務めた。 ・紀伊半島野生生物研究会等の各種団体が主催する教室・講座・シンポジウム・サミット等に対し講師派遣を行った。 ・環境省近畿地方環境事務所・田辺自然保護官事務所と共にアフリカツメガエルの駆除活動を行った。 ・和歌山県水産試験場「河川及び海域での鰻来遊・生息調査事業」に協力した。 ・和歌山県自然環境室より依頼を受けて特定外来生物に係る専門家調査を実施した。 ・和歌山県外来種リスト作成及び和歌山県レッドデータブック改訂に係る各分野の専門家調査員会に出席、資料収集にあたった。 ・和歌山県立博物館の田辺市玉置氏所蔵貝類標本調査に協力した。 ・紀の国サイエンスラボが行う子供向けの科学実験教室に協力した。 ・NPO南海せとうちジオガーデンからの依頼で、野鳥観察イベントの講師を務めた。 ・岡山理科大学理学部動物学科からの依頼で野外調査実習の講師を2日間務めた。 ・和歌山大学工学部のデザインシステム計画研究室からの依頼で、ニホンオオカミを題材とした研究成果発表に2日間協力した。
自己評価・課題・改善案	館の運営に支障のない範囲で今後も積極的に協力していく。

B. 外部機関との連携・調査が行われたか

平成30年度目標	要請に応じ連携・調査を行う
実績	日本植物分類学会からの要請を受け、環境省第5次レッドリスト見直しのための調査を和歌山植物研究会と連携して行った。
自己評価・課題・改善案	今後も、館運営に支障のない範囲で、積極的に調査を行う。

7. 人材育成

自然博物館長による所見	学芸員資格取得に係る博物館実習、インターンシップ制度による中・高校生の受け入れ等を通して、自然史系博物館活動の実際を周知してもらうとともに、人材育成に努めている。一方で、理系以外の博物館実習生を受け入れざるを得ない状況も生じてきており、こうした学生にも対応可能で有益な研修プログラムの策定と実施に努めていくことが必要である。
評価部会所見	理系以外の博物館実習生の受け入れにかかる研修プログラムづくりは数年来の課題であるので、具体化する必要があろう。この受け入れは館業務にとって負担が大きい、館の存在意義をアピールするためにも、継続的に進めて頂きたい。このような実習生にもしっかりと理科教育を受けることは重要であろう。30年度に試行的に始まった教育普及事業であるジュニア自然博アカデミーのような長期的な視点にたった人材育成の試みも十分評価できる。

①博物館実習

A. 博物館実習、インターンシップ、教員研修等を受け入れているか

平成30年度目標	館の運営に支障がない限り積極的に受け入れる
実績	学校教育現場からの要請に応じて、教員の地域社会体験研修を1名、博物館実習6名、職場体験学習及びインターンシップは中・高校から18校43名を受け入れた。
自己評価・課題・改善案	引き続き可能な限り積極的に受け入れる。

8. 組織と運営

自然博物館長による所見	館の置かれている立地から、津波等防災に係る危機事象対応マニュアルに従った対応及び訓練を、日頃から徹底することが肝要である。昨年は訓練実施日を指定せずに抜き打ち的な訓練が実施されたが、あらかじめ館内で取り決めていたマニュアルに沿って速やかな対応をとることができた。個人情報、データ管理等も県の方針に従って適切に処理されていると評価できる。教育庁主催の人権研修にも全員が参加したほか、館独自でもセクシュアルハラスメント、パワーハラスメントについての研修を実施した。
評価部会所見	防災訓練や各種研修を行っている点は評価できる。利用者ニーズと満足度については、自発的にアンケートに記入した利用者の意見しか把握できていない。従って、好意的な意見に偏っている可能性がある。利用者をランダムに選んでアンケートを行わないと実態は評価できない。一方、専門家としての学芸員のレベルアップのため、学会参加等の研修についても積極的に進めてほしい。そのためには学芸員が、もっと、外部の研究会や学会に参加できるような環境条件を整えるように、県も努力して貰いたい。そして、職員の研修実績の中に、研究上の研修、たとえば学会や研究会での研修も取り上げて評価するべきである。

①組織・人員

A. 危機管理・防災体制についてマニュアルを作成、実地訓練等を行っているか
また、日常的な取組が行われているか

平成30年度目標	教育庁職員防災体制、自然博物館危機事象対応マニュアルに沿って、実地訓練等を行う
実績	県庁全職員を対象に災害を想定した参集訓練が行われた。
自己評価・課題・改善案	訓練実施日を指定せずに抜き打ち的に行われたが、決められた時間内に参集を終えることができた。

B. 個人情報の管理・データ管理が適切に行われているか

平成30年度目標	データの管理に留意し、データの漏えいについては細心の注意を払う
実績	データ管理に注意を払い、漏えいはなかった。
自己評価・課題・改善案	引き続きデータ管理には細心の注意を払い、流出事故等が発生することのないよう心掛ける。

C. 館内外の研修に対して、職員が参加できる体制がとられているか
職員は参加しているか

平成30年度目標	職員に可能な限り受講を奨励する
実績	教育庁関係全職員を対象とした人権研修を受講した。
自己評価・課題・改善案	館の運営に支障のない限り、研修参加を奨励する。

②県民の期待に応える運営

A. 利用者数：当該年度の利用者数は何人か

平成30年度目標	110,000人（前年度並み）
実績	入館者数109,201人、観察会等の参加者延べ26,912人（移動水族館や出前授業等含む）、県民からの問い合わせ年間約500件。
自己評価・課題・改善案	展示と普及活動の充実に努めるとともに、広報に力を入れ利用者増を目指す。

B. 利用者の満足度、ニーズなどの調査を行っているか

平成30年度目標	アンケート調査を実施する
実績	周年アンケートを実施して、毎月ごとの集計結果を回覧した。1,483人からの回答があり、全体を通じて82%が「良い」との評価であった。
自己評価・課題・改善案	アンケートや来館者からの指摘、提案、意見をしっかりと受け止めてできることから改善を進める。

C. 調査結果を反映して運営を行ったか

平成30年度目標	アンケートをもとに可能な限り対応する
実績	すぐに改善できる項目については取り組み、展示解説パネルの充実、照明の改良による水槽展示の見やすさの改善等を行った。
自己評価・課題・改善案	アンケートの調査結果をもとに、予算も勘案しながら改善できるところから対応する。

③情報公開

A. 使命、目標、計画などの方針を公開しているか

平成30年度目標	ホームページ上で公開する
実績	使命、目標、計画については、H27年12月よりホームページ上で公開。
自己評価・課題・改善案	今後も、公開を継続する。

9. 施設・設備

自然博物館長による 所見	開館後、36年が経過し、すべてにわたって老朽化の著しい当館であるが、日常的な保守管理の徹底によって、特段大きな事故が起きていないことは評価できる。総論でも述べたように、予算の獲得に努めた結果、海水取水管、駐車場ブロック塀、研究室空調機、地下ダクト取替等の修繕を実施することができた。
評価部会所見	概して、施設整備や修繕を実施したことは高く評価でき、今後も整備・修繕を計画的に進めて頂きたい。ただ、管理運営費の中でも「修繕料」が占める割合が非常に高く、その点からも新館建設の早急化が望まれる。老朽化した設備の更新は喫緊の課題である中、施設・設備の修繕に利用できる予算の獲得により一部が改修できたのはよかった。新館計画の可能性が高まったことを考慮して、よりいっそうの計画的な改修を進めてほしい。バリアフリー・ユニバーサルデザイン等への対応については年度毎に具体的な目標を設定することが望ましく、適切な研修等への参加も考慮してほしい。ともかく、維持・管理の労力は大変なものがあるので、職員に労務上の過度の負担が生じないよう、県ともよく協議し実施して頂きたい。ただし、施設の維持管理に関しては、どのような長期的計画に沿った修繕等がなされているのか明確にする必要がある。

①施設設備の維持管理

A. 定期点検の有無、安全衛生の管理が行われているか

平成30年度目標	設備等の定期点検を実施するとともに、安全衛生についても日常的な管理に努める
実績	各担当職員による日常的な整備を複数回行う等の強化を行った。施設設備において、特段大きな事故はなかった。
自己評価・課題・改善案	未然に事故を予防するため日常点検・整備等に重点を置いた管理を実施する。

B. 施設・設備の改修や新たな整備が行われたか

平成30年度目標	予算の範囲内で計画的に実施する
実績	海水取水管修繕、駐車場ブロック塀修繕、研究室空調機修繕、地下ダクト取替修繕等に約4,400万円をあてて修繕、整備をはかった。
自己評価・課題・改善案	引き続き老朽化した施設整備の修繕および維持管理を実施する。

C. 長期修繕計画を有しているか

平成30年度目標	平成26年度以降5年間の修繕計画の5年目の計画に沿って修繕を行う
実績	取水ポンプ室ポンプ取替修繕、熱交換器プレート取替修繕等を実施した。
自己評価・課題・改善案	老朽化したポンプ等の更新、改修を実施する。

②快適性の向上

A. バリアフリー対策、ユニバーサルデザイン等の対応が取られているか

平成30年度目標	予算の範囲内で実施する
実績	外国人の来館者に対応するために職員が外国語対応できることをアピールする関西おもてなしバッジを着用したり、小さい子供が親しみやすいように展示説明文を平易な表現にしたり、車いす利用の方が移動しやすいように備品等の配置換えを行い、通路を広げるよう工夫した。
自己評価・課題・改善案	今後もバリアフリー対策、ユニバーサルデザイン等の対応を積極的に行っていく。

B. 利用者に対する適切な接遇が行われているか

接遇の向上が図られたか

平成30年度目標	寄せられた意見に基づいて、朝礼等において日常的に喚起する
実績	来館者からの質問、電話等による問い合わせには、相手の意をていねいに汲み取り適切に対応することができた。
自己評価・課題・改善案	引き続き利用者に対して、ていねいな接遇を行う。

10. 財源

自然博物館長による所見	県財政状況の厳しい中で、約4,400万円の修繕費を獲得し、施設・設備の修繕が行われたことは、来館者の安全確保や、展示環境の維持を考えれば当然のこととは言いながら大きな成果である。一方で、資料収集や調査研究のための予算の増額はなかなか望みがたい状況の中で、外部資金や大学等研究機関との共同研究を求めてゆくことも一つの方途であろう。研究成果の公表が強く求められているところでもあり、研究設備・備品の貧弱な現状と、その必要性を理解していただく必要がある。
評価部会所見	早急に科学研究費補助金を受け入れられる体制の整備が求められる。科研費等、外部資金の獲得などのためにも、特に他大学・研究機関との一層の交流を進めて頂きたい。新館建設へ向けた積極的なアピールをして、研究設備・備品等の予算も経常的に確保することが望ましい。修繕費を獲得して、施設・設備の修繕を進めたことは高く評価したい。学芸員自身が研究費を獲得することも、今後、いっそう努力してほしい。

①予算の確保

A 入館料収入・当初計画に対する実際の収入達成率

平成30年度目標	2,000万円（当初見込み）
実績	1,896万円で達成率は95%であった。
自己評価・課題・改善案	今後も目標が達成できるよう、展示の充実に努めるとともに広報の強化を進める。

B. その他の収入の確保について

平成30年度目標	図録・館だより販売23万円（当初見込み）
実績	H30年度販売実績は36万円
自己評価・課題・改善案	魅力ある図録、館だよりの発行により、収入の確保に努める。

C. 外部助成金等を獲得しているか

平成30年度目標	可能な限り助成金獲得に努力する
実績	科研費に関しては内規の取りまとめの過程にある。2020年度の特別展準備に資するため、（公財）船の科学館からの助成金50万円を獲得した。 水産庁委託「河川及び海域での鰻来遊・生息調査事業」調査費1,000千円（県水産試験場と共同研究）を獲得した。（財）海の科学館からの助成金については落選した。
自己評価・課題・改善案	今後とも、各学芸員が自己の仕事を勘案しながら、外部助成金の獲得に努めて調査と研究を行う。